



〈連載〉

「^つ積ん^{どく}読」の本棚から【2】

気になる日本語

——『毎月新聞』『日本語の将来』

山本良一

今の世の中、ほんとにいろいろ気になることだらけである。イラク戦争、日本の安保理常任理事国入り（個人的には反対!）、憲法9条の行方（死守して欲しい!）、年金問題、凶悪犯罪の多発（街を歩くときも緊張!）、異常気象（酷暑の夏! 台風も多数上陸!）、プロ野球の今後の体制、……。枚挙にいとまがない。あつ、もうひとつ、日本語の将来も。

「じゃないですか禁止令」

言葉は変化する。当然のことである。一時的な流行に終わる表現もあるが、後世に残っていくものもある。

私が教師になった80年代当初、「チョーむかつく」と言われて、ぎょっとしたもののだが、この「チョー」も「むかつく」も今なお健在である。そしてどちらも後世に残っていつてほしい日本語である。

でも、「チョー」よりも「むかつく」よりも、とにかく、早く消えてほしい表現がある。それが、「～じゃないですか」という言い方。だいたい、「～じゃないですか」というのは、相手を糾弾するときに使うきつい表現だったはずだ。「あなたはこの前の記者会見で、嘘は言っていないと断言したじゃないですか!」といった具合である。そういう元来厳しい表現を、やんわりと同意を求めるのに使うようになったというわけだ。しかし、いくらやんわりと使っても、もともととの有無を言わせぬ押しつけがましき残っている、それが、私はたまらなくいやなのである。

この言い方が気になりだしたのはもうかれこれ10年くらい前だろうか。ごく一部の「変わった」人が使っているだけだと思っていたら、それ以降、消えるどころか、

使用者は増える一方である。若い人だけではない。いい大人も平気で使っている。さらに、この言い方は、たちの悪いことに、雑談だけではなく、正式な場面でも使われるのである。これが、「チョー」などとは違うところだ。たとえば、テレビのコメンテーターは、間違っても「この問題って、チョーむずかしい」とは言わないが、「この問題ってほんとにむずかしいじゃないですかあ」は連発する。

「もうたくさん! もういやだ!」と思っていたとき出会った本がある。表紙に大きく印刷された「じゃないですか禁止令」という文字が目飛び込んできた。戦場で出会った親友のように感じ、一気に読んだ。

◎『毎月新聞』（佐藤雅彦著、毎日新聞社、2003.3）

これが、その本のタイトルである。毎日新聞が出した毎月新聞とはしゃれた名前だと思ったら、1998年10月から2002年9月までの4年間、『毎日新聞』に月一で連載された記事だとある。その最初の号（創刊準備号）が「じゃないですか禁止令」なのだ。著者の佐藤雅彦氏は慶應義塾大学の教授だが、私としては、「だんご3兄弟」の作詞者という方がぴんと来る。なにしろ楽譜まで買ってしまったもので……。またNHK教育テレビで放映中の「ピタゴラスイッチ」の監修もしている。余談だが、この番組、大人が見ても驚くほど「仕掛け」に充ち満ちた番組である。一見の価値ありですぞ。

話を、本に戻す。『毎月新聞』では、佐藤氏が気づいたさまざまなことを鋭い切り口でユーモアたっぷりに評している。とくに、最初の「じゃないですか禁止令」には、首肯させられるばかりである。著者曰く、

「～じゃないですか」と言われたら（略）そのことを知って当然、というニュアンスまで生むことも多い。つまり、だれかがその言葉を言った途端、そのことが、既成の事実と化してしまう、実に巧みな言いまわしである。

さらに、多くの人に浸透してきたことも指摘し、次のような宣言をしている。

当「毎月新聞」の編集長として私は、この「じゃないですか」隆盛の状況を看過するわけにいかず、多少の誤解を恐れず、ここにその禁止令を訴えるものであります。

Bravo! 大賛成である。

そのほかにも、「単機能ばんざい」(第1号)、「ネーミングの功罪」(第16号)、「デジタルって何?」(第20号)、「つめこみ教育に僕も一票」(第30号)、「記号のアイコン化」(第44号)など、氏の発想と表現には魅せられるばかりであった。ぜひ一読をお勧めする。

◎『日本語の将来』

(梅棹忠夫著、日本放送出版協会、2004.6)

日本語の将来について非常に気になることを提案しているのがこの本である。著名な学者である梅棹氏が、日本ローマ字会会長であることは知らなかった。また、不勉強ながら、日本ローマ字会という団体も初めて知った次第である。

さて、この本の8割は、梅棹氏がこれまで行っていたいくつかの対談を収録したものである。当然のことながら、同じ主張が繰り返してくる。最初は疑問に感じていた主張にも、次第に慣れてきて、しまいには賛成したくなる。

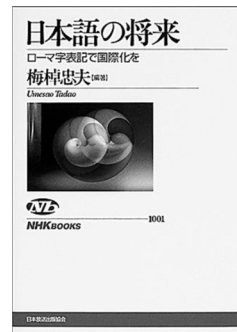
氏の一番重要な提案は、日本語の表記法をローマ字に改めよということである。日本語は文法的には非常に規則的であり、外国人も聞き話すだけなら割と早く上達するが、非常に複雑な文字表記（特に漢字）が原因で学習者が増えない、とある。さらに、我々日本人も、漢字の習得にかかる膨大な時間を別のことに使えるではないか、とも言う。日本語のローマ字表記は、ハングルの普及や、中国語のローマ字表記（ピンイン）を考えれば無理な相談ではないと思う。

また、氏の言うローマ字は、英語教育のためではな



毎月新聞
佐藤雅彦 著
毎日新聞社、2003.3
本体価格 1,300円

日本語の将来
梅棹忠夫 編著
日本放送出版協会、2004.6
本体価格 1,160円



く、日本語のために使うもので、したがってヘボン式ではなく、訓令式を用いる。「し」は si, 「ち」は ti, 「ぢ」は zi というように。

1000年使ってきた文字ですから、わたしたちには愛着がありまして、なかなか振りすてにくいですが、とにかく21世紀以後の未来の日本文明が生き抜いていくためには、背に腹はかえられない、とわたしは見ているんです。

と言ひ、漢字とローマ字を和服と洋服に譬える。和服はすばらしいが、今日の文明社会では和服では活動できない、と。

氏の考えをすべて紹介することはできないが、日本語のため、日本人のため、外国人のために、訓令式ローマ字表記を採用すべきだ、とまとめられよう。

最後に、いくつか付け加えておく。まず、梅棹氏は視力を失ったということだが、ラジオを聞いていて一番困るのが同音異義語だとか。同音異義語が多いのは、漢字表記をしているためであり、ローマ字表記にすれば、同音異義語の使用を避けるようになり、日本語自体も変化するかと予測している。また、和語は極力かなで表記してあるのが印象的であった。平易な感じを受け、かつ読みやすかった。

私自身、梅棹氏の提言をそのままは受け入れられないが、かなりの部分は理解できる。この提言が大きいうねりとなるとき、日本語も大きく変わるのだろう。

(やまもと りょういち・筑波大学附属高等学校教諭)